

令和 5 年 10 月 27 日現在

機関番号：34449

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10729

研究課題名（和文）失語症者のコミュニケーション能力評価尺度の作成

研究課題名（英文）Development of a scale for evaluating the communication ability for people with aphasia

研究代表者

森岡 悦子（Morioka, Etsuko）

大阪保健医療大学・大阪保健医療大学・客員教授

研究者番号：70441334

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、失語症者における情報伝達力に注目したコミュニケーション能力を評価する尺度を考案することを目的とした。試案した評価尺度は、日常生活上の伝達を要する場面を課題とし、伝達内容の複雑性、具体性、論理性の各要素の難易度を調整した14の上位項目で構成した。本尺度は、既存の実用コミュニケーション能力検査（CADL）短縮版との有意な相関から基準関連妥当性が認められ、さらに因子内容からも妥当性が認められた。また、本評価尺度のCronbachの係数より項目の内的整合性が高いと判断された。試案した評価尺度は、失語症者のコミュニケーション能力の評価として有効と考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

失語症者の活動の向上と社会参加の促進に必要なリハビリテーションと支援を進める上で、コミュニケーション能力の評価は不可欠であるが、評価に時間を要するために、臨床における実施頻度は十分とは言えない。本研究で考案した評価尺度は、短時間で失語症者のコミュニケーション能力を評価できるため、実用化により必要な頻度で評価が可能となり、リハビリテーションと社会支援に効果的に役立つことが期待できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a scale for evaluating the communication ability of people with aphasia, focusing on information transfer ability. The proposed scale consists of 14 items, each of which is adjusted for complexity, concreteness, and logic of the content being communicated, targeting interactions of daily life. This proposed scale was significantly correlated with the Communication ADL Test (CADL) short form, and the criterion-related validity was confirmed. By factor analysis, three factors were extracted, and the construct validity was confirmed. In addition, the alpha coefficient of Cronbach of this scale was high, and inner consistency was confirmed. Hence, this proposed scale can be useful for evaluating the communication ability of people with aphasia.

研究分野：失語症学

キーワード：コミュニケーション能力 失語症 言語的活動 評価

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

失語症当事者は、言語の機能的障害により、日常および社会的コミュニケーションにおける情報伝達の側面に支障をきたし、活動制限や参加制約を生じる場合がある。そのような生活上の制限や制約を減らし、その人らしい生活を送るためには、回復期から生活期にかけて、症状に応じた適切なりハビリテーションと支援が必要であり、その方針の検討にはコミュニケーション能力の状態や改善の可能性を把握するための評価が重要である。しかし、評価には時間を要し失語症者への負担もあることから、臨床における実施頻度は必ずしも十分とは言えない。そこで、評価の所要時間を短縮して負担を軽減しつつ、コミュニケーション能力を的確に捉えることのできる評価尺度の開発が必要である。

### 2. 研究の目的

本研究では、失語症者を対象とするコミュニケーション能力の評価尺度の作成を考案することを目的とした。コミュニケーションの評価に必要な要因を満たし、評価基準を検討し、内的整合性と妥当性を重視するとともに、臨床での定期的な実施を可能とするために、所要時間の短縮と手続きの簡略化を目指した。

### 3. 研究の方法

失語症者を対象とするコミュニケーション能力の評価尺度の試案を作成し、研究協力施設の外来リハビリテーション、デイケア、デイサービスなどを利用する在宅失語症者に実施し、同時期に施行された実用コミュニケーション能力検査 (CADL)、標準失語症検査 (SLTA)、レーブン色彩マトリックス検査 (RCPM)、CADL 家族質問紙 (CADL-FQ) との関連性を分析した。

試案評価尺度の概要:失語症者のコミュニケーション能力を評価するための評価項目の検討にあたり、先行研究より、言語機能、非言語的認知機能、言語的活動性などの構成要素を重視して項目選定を進めた。課題は、日常生活場面における伝達場面とし、伝達内容の複雑性、具体性、論理性の各要素の難易度を調整した項目で構成し、14 の上位項目にまとめた。採点は、0~4 の 5 段階の順序尺度とした。口頭以外の代償反応も評価対象とした。所要時間は、約 30 分であった。対象者:本試案評価尺度を、在宅失語症者 30 例を対象として実施した。対象者の年齢は平均  $62.8 \pm 9.3$  歳。失語症型は、非流暢性失語 16 例、流暢性失語 14 例。失語症重症度は、軽度 8 例、中等度 15 例、重度 7 例であった。

### 4. 研究成果

試案した評価尺度を、以下に分析した。

#### (1) 妥当性

##### a. 因子妥当性

得られたデータについて因子分析を実施した。因子数の決定基準は固定値 1 以上、項目の選出基準は因子負荷量 0.4 以上としたところ、因子負荷量は低いものの 3 因子が抽出され、14 項目全てが選出された。3 因子は、言語機能、非言語的認知機能、言語的活動性に対応するものであり、これは項目選定時に基準とした 3 要素に対応するものであり、失語症者のコミュニケーション能力を評価する上で重視すべき要因に一致し、理論的に適切であると判断された。

##### b. 基準関連妥当性

既存の実用コミュニケーション能力検査 (CADL) 短縮版の得点を外的基準として、本評価尺度との Spearman の順位相関係数を算出したところ、相関  $r=0.865$  ( $p<0.001$ ) であり、有意な相関を認めた。

#### (2) 内的整合性

本評価尺度の Cronbach の係数は 0.875 を示し、本評価尺度の項目の内的整合性は高いと判断された。

#### (3) 諸検査との関連

言語機能の指標となる標準失語症検査 (SLTA) と、本評価尺度との Spearman の順位相関係数を算出し、有意な相関を認めた。また、CADL 家族質問紙 (CADL-FQ) の総得点と、本評価尺度との関連においても、有意な相関を認めた。対象者の日常生活の活動性を、失語症者の家族への CADL-FQ 質問紙より分析したところ、言語的活動の他、非言語的活動、知識概念に基づく遂行力などの非言語的認知機能に関するクラスターに分類されたが、本尺度は、それらの要因と関連する項目を備えていた。

以上より、本試案尺度は、失語症者の総合的なコミュニケーション能力の評価として有用と考えられた。

本研究は、経過中に新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、協力施設でのデータ収集が困難となり、全体のデータ数が制限された状態で分析を進めた。今回の解析の因子分析で3因子が抽出できたものの負荷量は低かったため、可能であればデータ数を増やし、安定した因子で妥当性を確認する。また本評価尺度の得点については、全項目の合計を総合得点としたが、今後、既存のコミュニケーション能力検査との要素的対応を考慮した詳細な解析から、各項目の評価の基準と項目の重みづけを分析し、より精度の高い評価として、臨床への適応を検討してゆく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森岡悦子、ほか	4. 巻 59-1
2. 論文標題 Communication Self-Efficacy Scaleの分析に見る失語症家族のコミュニケーション対応における課題 失語症重症度との関連から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芝さやか、森岡悦子	4. 巻 38-1
2. 論文標題 失語症者の家族の介護負担感について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高次脳機能研究	6. 最初と最後の頁 99-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 酒井希代江、森岡悦子、ほか
2. 発表標題 視線移動パターンが内容理解に及ぼす影響
3. 学会等名 総合福祉科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今西祐子, 高田晃宏, 稲葉沙枝, 坂田理恵子, 大西環, 柴本勇
2. 発表標題 疾患重症度が同レベルと診断された球麻痺型ALS患者3例の摂食機能.
3. 学会等名 第45回日本嚥下医学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲葉沙枝, 坂田理恵子, 今西祐子, 大西環, 柴本勇
2. 発表標題 口腔内乾燥や口腔内汚染を呈する患者の咽頭観察～嚥下内視鏡所見での検討～
3. 学会等名 第45回日本嚥下医学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坂田理恵子, 稲葉沙枝, 今西祐子, 大西環, 柴本勇
2. 発表標題 急性期患者における各種低栄養評価ツール結果の比較.
3. 学会等名 第45回日本嚥下医学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 (分担執筆) 森岡悦子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 360
3. 書名 標準言語聴覚障害学 失語症学 第3版	

1. 著者名 (分担執筆) 森岡悦子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ぱーそん書房	5. 総ページ数 624
3. 書名 やさしい高次脳機能障害用語事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大西 環  (Ohnishi Tamaki)  (70747047)	大阪保健医療大学・言語聴覚専攻科・教授    (34449)	
研究分担者	松井 理直  (Matsui Michinao)  (00273714)	大阪保健医療大学・保健医療学部・教授    (34449)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関